

日本YWCAの使命(ミッション)
イエス・キリストに学び、共に生きる世界を実現する
世界の人々と共に人権・平和・環境の問題に取り組む
第29総会期主眼
平和を実現する人々は幸いである一タイによる福音書5章9節
日本YWCAビジョン2015
(1) 非核・非暴力による平和を構築する
・平和憲法をまもり、世界に広める
・市民レベルで東北アジアの信頼関係を築く
・女性と子どもの権利をまもる
・パレスチナYWCAの活動を支援する
(2) 若い女性のリーダーシップを養成する

YWCA 12

DEC. 2007

発行所 日本キリスト教女子青年会
〒102-0074
東京都千代田区九段南4-8-8
Tel. 03-3264-0661
E-mail: office-japan@ywca.or.jp
編集発行人 石井摩耶子
振替 00170-7-23723 (毎月1日発行)
定価1部 150円
年間購読料2,200円 (送料込)
www.ywca.or.jp

Merry Christmas 9条の音 奏でよう



YWCAオリジナル9条カード
クリスマス・新年バージョン
(詳細4面掲載)

20年経った今では、クッキングハウスの心の居場所は3カ所になった。「ふしぎなティールーム」では喫茶室で交流しながら、全国からの心の相談やメンタルヘルス市民講座を開いて心の病気への理解を広げる活動をしている。夕方の生活支援の場「クッキング

「おごっこね」から話になる
20年も入院していた人の社会復帰のボランティアや保健所の精神科デイケアのグループワーカーをしながら、自分のスタイルで心の居場所をつくるしかない。1987年、調布の街に12畳のワンルームを借り、食事作りを通してオープンに交流する場「クッキングハウス」を開いた。「あなたが来てくれてうれしい」と、どんな状態でやって来ても心から歓迎した。今まで行き場なかった人たちが、お花畑でも、期待いっばいでやってくるようになった。いつも病院でみている時の、うつむいた暗い表情とはまったく違い、にこっと笑顔も見せてくれる。人間らしい可能性をいっばい持っているのに、患者である役割を演じ自信を失い、あきらめていただけなのだ。私の役割はすべてを肯定して受けとめ、いい所を発見し、心からそのことをほめて伝えて、その人らしさを取り戻していくことを応援することなのだ、と気付いた。

32歳で東京YWCA専門学校社会福祉科の学生になり、精神科病院に実習に行き、心病む人たちに会った。カギがかかり自由に出出もできない病棟に、患者さんと言われる人たちが長い年月暮らしていた。家族の面会も減りなく、社会復帰の望みも遠く、みんなうつむいて、とほとほと歩き回っていた。高度経済成長期を迎え繁栄しているかに見えた精神科医療と福祉の遅れた実態を初めて見た。日本の文化の水準は、本当は乏しかったのだと気づき悲しかった。私の正義感に怒り、いっばいになった。実習で毎週通ううちに、優しく誠実で、生きる要領は下手で傷つきやすいもろさを抱えている人間らしさに共感するようになり、精神科の患者さんという見方は消えていった。心の病気をしたって同じ人間。一緒に地域で当たり前の暮らし



心の居場所を

を。
給食で黙々と並び、楽しい会話もなく食べ、残飯を青いバケツに捨てて、黙ったまま部屋に戻っていく背中が特に淋しく感じられた。食事を気持ちいいコミュニケーションの媒介にできないものか切実に思った。

松浦幸子 (「クッキングハウス」代表・精神保健福祉士・東京YWCA会員)



「生きてみようよ」心の居場所で見つけた回復へのカギ
初めて当事者から夢と希望を届ける本を出版できた。
「生きてみようよ」心の居場所で見つけた回復へのカギ(教育史料出版会)には、47名のクッキングハウスのメンバーたちが自分の言葉で心の病気のつらさ、居場所仲間に出会えた喜び、自分らしく生きていけるのだと思えたことが回復につながったことを誠実に書いてくれた。

「おごっこね」から話になる
20年経った今では、クッキングハウスの心の居場所は3カ所になった。「ふしぎなティールーム」では喫茶室で交流しながら、全国からの心の相談やメンタルヘルス市民講座を開いて心の病気への理解を広げる活動をしている。夕方の生活支援の場「クッキング

「おごっこね」から話になる
20年経った今では、クッキングハウスの心の居場所は3カ所になった。「ふしぎなティールーム」では喫茶室で交流しながら、全国からの心の相談やメンタルヘルス市民講座を開いて心の病気への理解を広げる活動をしている。夕方の生活支援の場「クッキング

闇に光を もたらすために

青木恵子

善段何気なく歩いている道も、体の具合が悪かったりすると不都合や不都合がわかる。何かの車柄が頭にあると、それまで気づかなかったものが急に目につくようになったということはいっばい経験する。見ているようで見えないことが多い。

この映画の原題は「invisible children」で、このinvisibleという言葉が強く印象に残った。見えぬ、知られない・存在に気づかれない子ども、見えないとは裏返せば見えない、見ようしない者の存在があるということだ。invisible people(大人)も想像できる。障がいのある人・病気の人・失業等で生活が困難している人など、生き難さの中で苦しむ人を見ることは自分たちが生んだ問題に向き合うことで、できれば避けたいと考えられる人も多い。

社会が排除してきた人たちをあえて食卓に招き、穢れとされた人に手を触れて癒されたのがイエス・キリストである。その場にいた民衆は、自分たちが見たくないものを直視させられたことだろう。社会が灯りをともしたらない闇に光を入れよう。社会をあからさまにされる。

クリスマスを迎えようとしている。クリスマスは長い闇の冬から太陽の輝きの増す春へ移る光の祭と云われる。闇を創り出す人間を哀れみつつ、闇に置かれた人を光のうちにおかれるイエス・キリストがこの世に送られたこの意味を想うときである。(静岡YWCA会員)



湘南YWCA 創立60周年記念 年表発行 歩み続けるために

湘南YWCA創立60周年を記念して、最近10年間の年表作りを終えました。40周年、50周年の年表と合わせ、60年の流れを振り返ることができました。創立当初からの時々に先輩方の大切にされてきたこと、力を注ぎ込まれてきたことを見え、その活動の様子も思い起こされます。時代と共に少しずつ活動内容や他団体との関係も変わってきていることもわかりました。今は、キリスト教基盤の学び―聖書の会、子どもの人権に関わる活動―難病の子どもたちに

贈るキルト作り、子育て支援活動を月々のプログラムとして続けています。キルト活動は展示会を開くことで地域への広報の意味もあり、新しい活動に参加される方もあります。子育て支援の活動は、毎年10組位の親子を受け入れており、この活動を支えているのは若い保育者やママの協力です。会員は少数ですが高齢ですが、周囲の多くの方々の理解と協力で湘南YWCAは歩み続けることができます。

湘南YWCA 松山泰子

次はあなたがファシリテーター
すぐに使える「平和ワークショップの素」お見せします！
ワークショップ大会のお知らせ
全国のYWCAが経験と知恵を出し合っ、カラダとココロとアタマをつかって平和をつくり出す「ワークショップ大会」を企画しました。
■日時：2008年2月2日(土)13:00~3日(日)15:00
■会場：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)
■定員：100名(1ワークショップ20名~30名)
■参加費用：全日7,000円 1日のみの参加4,000円(宿泊費・食費別)
■申込締切：申込用紙にご記入の上、1月18日(金)までに日本YWCAへ FAX・Eメール・郵送でお送りください。
■お問合せ・申込先：日本YWCAビジョン2015委員会 (office-japan@ywca.or.jp)

クリスマス&新年には 9条カードを届けよう
ビジョン2015委員会「9条キャッチコピー」を募集したところ、全国から70通をこえる応募をいただき、応募作品から3種類の9条カードを作りました。
価格：各1枚50円+送料
*1度に合計300枚以上ご注文の場合は1枚あたり46円+送料
*詳細はホームページをご覧ください。
お問合せ・申込み先：日本YWCAビジョン2015委員会
*クリスマスバージョンは1面右上カット、他。
*品切れの場合はご容赦下さい。

- 【協力ありがどうですか?】
【賛助費(以下敬称略)】
大工原製子 山田美代 亀田芳子 大澤千穂
松尾洋子 伊藤順子 石川松子 伊藤真智子
伊藤悦子 高橋敦子 高橋須賀子
野崎文子 大島和美 渡辺美穂子
大竹文子 阿部幸子 高橋奈子
小尾亮子 安田寛子 荒井重人
荒木紀子
世界YWCA賛助費
大島和美 石川松子
一般寄付 万年禮 唐崎包代
平和教育基金 渡部幸子
大河原美穂子 浅原由美
豊蔵央沙 大澤康子 伊藤真智子
寺嶋公子 河合奈子 佐渡スズ
オリーブの木基金
青木浩子 大平聡子 田村千穂子
KEIKO KATAGIRI 阿部幸子
山梨英和中学校高等学校

AROUND THE GLOBE 今、地球上で

12月1日は世界エイズデーです

YWCAは、70カ国以上の国々で女性と少女を対象としたAIDS対策に取り組んでいます。

【ババア・ニューギニア】
ババア・ニューギニアのHIV感染者数は、太平洋地域全体の3分の1以上を占めています。国連エイズ合同計画(UNAIDS)の2006年の調査によると、面接した女性の半数以上が売春行為をしており、男性の3分の1以上が買春しています。1998年以来、ババア・ニューギニアYWCAは、性産業で働く女性たちを支援し、女性たちがHIV/AIDSを理解し、自分たち自身と顧客を感染から守る方法を認識することに努めています。YWCAはコンドームの正しい使用方法についての情報を提供し、デモンストレーションを実施しています。さらに女性用のコンドームを配布しその受け入れの促進をねらいとした国家的プロジェクトチームの先頭に立っています。また、YWCAが提供する人気ラジオ番組では地域コミュニティへの啓発教育を進めると共に、電話相談にも応じています。読み書きができず、職種技能がないばかりに性産業で働かされていたたくさんの女性たちが、YWCAの職業訓練所でトレーニングを受け、今では他に仕事の選択ができるまでになっています。

【ベリーズ】
ベリーズは中米地域でHIVの罹患率が最も高く、その割合は人口の2.5%に達しています。ベリーズYWCAは、2005年10月に美容と理髪を扱うサロン「ベラ・エクスプレッションズ(美しい表現)」を発足させました。YWCAの中途退学者支援プログラムで学んだ学生たちがサロンのスタッフとなり、彼らはHIV/AIDSについてのピアエデュケーター(同世代教育者)としての研修も受けました。これらの学生は、サロンの利用者たちと知識や情報を共有する方法ばかりでなく、AIDSについての実情とその予防についても学びました。このプログラムは成功し、2006年には世界YWCAと国連人口基金(UNFPA)から資金提供を受けることにより、その規模をさらに拡大しました。ベリーズYWCAは、8カ所の理髪店で発足当初の基本理念に基づきスタッフの研修をおこない、今や毎週800人以上の若い人々にHIV/AIDSについての正しい知識が行きわたっています。

【アンゴラ】
人口の半数以上が18歳以下のアンゴラでは、少女たちが「健康でHIVに感染しない」で成長できるかどうか重要な問題です。2004年、アンゴラYWCAは、上記の目標を掲げて、「橋を築く少女たち」プログラムを発足させました。このプログラムは10歳から16歳までの少女を対象に、人間関係を築く際のスキルはもちろんのこと、自尊心・健康とHIVについての認識・意思決定と自分の主張をはっきり伝えることの大切さについて教育しています。世界YWCAと国連児童基金(UNICEF)からの支援を得て、200人以上の少女たちがこのプログラムを通じて、自分たちの性と生殖に関する健康について十分な情報を得た上で決断することを学びます。少女たちは、YWCAの支援と指導を受けながら分科会を運営できるようになり、自分たちのコミュニティに新しい参加者を入会させ登録もさせています。このような活動は少女たちが自分たちの意志で参加し、このプログラムの存続に引き続き関わっていくことを確かなものにしていきます。

(世界YWCA季刊紙「コモンコンサーン」134号より)

種

聖霊によって神の子を身ごもると告げられたマリアは、畏れ戸惑いつつも、神の国実現の約束へ向けて自分の低い自分を用いられることを知り、神への謙遜を誦みあげました。やがて、いくなつげのヨハネと共にベツレヘムへ旅する途上の原でイエスを産み、飼葉桶に寝かせたと聖書は語っています。世の人々の無関心のたたなな、いわば孤立無援の状態のマリアの身に起きた一連の出来事の大きさを、一人の女性として想像する時、それらすべてを心に納め、思い巡らしていたと一言で記されている彼女の姿に深い感動を覚えすにはいられません。

先日訪れた聖地エルサレムやベツレヘムの神殿は、巡礼の最終地としてきらびやかに飾り立てられ、人々がひしめき合う場所でした。私には、剥き出しの岩肌の丘が砂漠へとつながる荒野の沈黙のなかに、神の約束への絶対の信頼と謙遜の身をもって生きたマリアを見るように思いました。今クリスマスを迎える私に必要なのは、歩を止め手を休めて、人の世の秩序を逆転させる神のみ手の働きに思いを巡らすこと。密やかに小さい者の傍らに立ち、今日も確かに生きて働かれる方がこの世に求められたことを覚えて。

寺嶋公子(常任委員・東京YWCA会員)

ウイメンズカウンセリング名古屋YWCA 8周年

悪あがきのすすめ
～あきらめない、へこたれない女の生き方～



名古屋YWCAにウイメンズカウンセリング名古屋YWCA(以下、WCNY)が設立されて、早8年となりました。WCNYは、女性が安心して生き生きと暮らせる社会を目指し、現在では女性の抱える心理的問題をサポートするために、専門的な訓練を受けたスタッフがカウンセリングやグループワーク・講座などを開催しています。WCNYは当初、会員活動でしたが、今年度より女性のための相談・支援事業部となり新メンバーも増え、よりいっそうの活動展開を期待されているとひしひしと感じています。

去る10月21日、8周年記念として講師に辛淑玉さん(株式会社社香科舎*代表)をお招きし「辛淑玉が伝授する「悪あがきのすすめ」～あきらめない、へこたれない女の生き方～」と題した講演会を開催しました。当日は80名以上の参加者で会場がいっぱいとなりました。講演会

が始まると同時に会場が辛淑玉ワールドとなり、フロアの期待も高まります。まず在日コリアンとして社会的に差別を受けてきた辛淑玉さん自身のことから、人の感じる「恐怖」について話をされました。私たちが怖いと思った相手とは、よい関係がつかれなかったり、差別したりすることがあります。しかし一番恐怖を感じているのは、なぜ自分が差別されているのか分からない被差別の側なのだということ。被差別の立場にある人にどう対応をするのか、私たちに試されているのではないかとこの問いかけがありました。

また柳沢厚生労働大臣の「女は産む機械だ」発言についてふれ、女性は毎月生理があり不快で痛い思いをしている。子どもと自分の命を懸け、痛みと危険を伴って子どもを産んでいる。自分の妻が子どもを産んだときの痛い思いをしたことすらわかっていない。鉄砲の弾と

しての子どもを産めという意味以上に、身近な人のことすらわかっておらず感受性が鈍すぎる」と語気を強めました。質疑応答のときに「戦争を儲けたから」という話や、憎恨たる思いで聞きました。日本が戦争して儲けようと思わないために、資本主義とは違う発展・生き方を社会に向けて提唱できるかどうか、これから平和活動の鍵だと私は感じます。問題解決をするためには、私はいっしょに、という2つをセットにして伝えることで、関係が良くなる方向に変わっていくと、今回の講演会を教わりました。この問題解決の伝え方は、WCNYでもおこなっている自己尊重・自己主張トレーニングにつながることであり、とても良い記念講演となりました。

内閣総理大臣 福田康夫 様
文部科学大臣 渡海紀三朗 様

沖縄戦「集団自決(強制集団死)」をめぐる教科書検定意見の撤回を求めます

沖縄戦の歴史事実を歪曲する教科書検定意見に対して、9月29日、沖縄で「教科書検定意見撤回を求める県民大会」が開かれました。「日本軍による強制集団死の削除にNo!」の強い思いをもって会場にかけつけた宜野湾・宮古島・石垣島はじめ各地からの11万6千人もの人々の声に、私たち日本YWCAは賛同と連帯を示すと共に、教科書検定に政治的に介入し、戦争の歴史を美化しようとする日本政府に対し、強く抗議します。

沖縄戦を体験した多くのおばあちゃんたちは、生き残った自分たちの証言を誤りとする教科書検定意見に、いても立ってもいられない思いで会場へ駆けつけました。また、その体験を聞いて育った多くの子どもたちを代表して発言した二人の高校生の、「ウソを真実といわないでほしい。あの醜い戦争を美化しないでほしい。たとえ醜くても事実を知りたい。学びたい。そして伝えたい。」という訴えを、日本政府は真摯に受け止めてください。政府が当事者の真実の証言を隠蔽し、一方で子どもたちの「事実を学ぶ」権利を奪い、「伝えたい」という平和を願う行動しようとする純粋な想いを潰すことなど、決してあってはならないことです。

日本YWCAは、これまで「ひろしまを考える旅」などを通して、韓国・中国YWCAと交流を深めてきました。その中で実感することは、真実の歴史の共有をなしにして和解は生まれないということです。歴史を知り、相手の痛みを学び、想像し、共有する、それが和解への第一歩だということ、私たちはくりかえし確認してきました。だからこそ、未来を担う子どもたちが歴史を学ぶため使う教科書の記述を歪曲してはならないのです。

文部科学省は、教科用図書検定調査審議会が決定したことであり、政治介入にならないようとの理由で、撤回に難色を示し、また、教科書会社に責任を転嫁し、教科書会社からの訂正申請で事を取りもたせています。しかし、沖縄県民や私たちが日本政府に求めるのは、検定意見の撤回です。検定の間違いを認め、間違いを正す制度をつくらせて検定意見撤回に向けて早急に動き出すよう、強く要請いたします。

2007年10月19日 日本キリスト教女子青年会(日本YWCA) 会長 石井摩耶子 総幹事 川端 国世

誰もがその人らしく 生きられる社会を!

「心の絆で結ばれ、弱き力を寄せ合って一緒に生きていける文化」(1面松浦幸子さん記事)を築くためにYWCAは取り組んでいます。3地域の活動を紹介します。



東京YWCA

乳幼児療育事業 東京YWCAキッズガーデン

地域のニーズにこたえて

東京YWCAキッズガーデンは、今年5年目を迎えます。数名の乳幼児からスタートした事業ですが、現在は、2歳児から中学1年生まで90名以上が在籍する療育事業となりました。乳幼児療育事業・土曜デイサービス事業に加え、相談室事業が昨年12月から開始しました。キッズガーデンが目指していることは、まず第一に「家族とともにある」ということです。毎日一緒に過ごす家族と共に、現在の子どもの状態をありのままに受けとめ、正しく理解していくための過程と一緒に過ごします。そして、専門の立場から子どもの現在を将来必要と考えられる援助を家族の理解のもと行っています。

東京YWCAキッズガーデンは、今年5年目を迎えます。数名の乳幼児からスタートした事業ですが、現在は、2歳児から中学1年生まで90名以上が在籍する療育事業となりました。乳幼児療育事業・土曜デイサービス事業に加え、相談室事業が昨年12月から開始しました。キッズガーデンが目指していることは、まず第一に「家族とともにある」ということです。毎日一緒に過ごす家族と共に、現在の子どもの状態をありのままに受けとめ、正しく理解していくための過程と一緒に過ごします。そして、専門の立場から子どもの現在を将来必要と考えられる援助を家族の理解のもと行っています。

「障がいがあってもあたり前に地域で暮らしたい、暮らせたい」と思い、知的障がいの子を持つ2人の母親が、当事者の働く場として立ち上げたのが、共同作業所「すてっぷ」です。普通のお母さんが、運営委員を募り規約を作り、借家の1階を喫茶、2階を作業場として、クッキーウエス(作業用布)作りの作業をはじめたばかりの頃、私たち銘路YWCAもボランティアとしてお手伝いに加わることになりました。

小規模作業所として公的助成対象になる利用者5名以上になり、支援員を雇えるようになるまでの3年間の伊藤代表の苦闘の姿も見てきました。昨年10周年を迎えるその記念誌の中で代表は、お金や物に関するところはクリア出来たが人間関係が一番大変だったこと、目指す目的は一緒に考え立ち上げたが、方向性や考え方の違いが生じ、親だ

からその違いを修復する難しさがあったと振り返っています。通所しているのが伊藤代表の娘「ちっちゃん」ひとりの時期もあつたことを思い出します。今、作業所は2カ所になり、20名のメンバーが、それぞれの家庭やグループホームから通っています。支える職員も8名に和やかな雰囲気の中で、各自能力に合った仕事を見つけています。そして確実に一人ひとりの「出来ること」は増えているのです。昨年はNPO法人格を取得、幾つもの山を乗り越えての歩みを重ねています。今の状況がベストでは決してなく、目指すスタイルには、まだ程遠いのが事実でしょう。その夢がいつかあたり前のこととして社会で認識される日をめざして、私たち銘路YWCAもひたすら心を込めて、必要とされるお手伝いをしていきたいと願っています。

足に悩んでいます。今、日本においては、3人に1人ががんで亡くなる時代とされています。神戸YWCAでは11年前にホームヘルパー養成講座を開講して以来、カリキュラムにはホスピス講習を組み入れています。その後も現任者を対象に在宅ホスピスケア研修を継続的に実施しています。終末期在宅医療に携わっておられる医師を囲んで事例検討を行ったり、ホスピス病棟を見学するなど、ヘルパーのスキルアップに努めています。「まごの手」利用者の中にも、できるだけ住み慣れた家で最期を過ごしたいと希望される方が増えてきました。ヘルパーができることは限られていますが、傍にいて身体をさすりながら手を取って話を聞く

次には「子どもとともにある」ことを大切にしながら、子どもたちには通園生活を通して生活していくために必要な力を獲得できるよう支援します。運動面・生活面・社会性を学ぶなど、更には「地域の中での関わり」では、多くの会員・ボランティアの支えを積極的に受けて進めています。また、キッズの子どもたちが通う幼稚園・保育園・学校や、幼稚園訪問やキッズガーデン講座を通しての連携を大切に進めています。

高年齢になっても障がいがあっても、最期まで自分らしい生活を営んで頂くためのお手伝いのできたらと願っています。そのために、今後、ボランティアも含めた地域で支えるネットワーク作りを進めてゆきたいと思っています。

銘路YWCA 近藤真里子

銘路YWCA

心をこめて ボランティア活動

「障がいがあってもあたり前に地域で暮らしたい、暮らせたい」と思い、知的障がいの子を持つ2人の母親が、当事者の働く場として立ち上げたのが、共同作業所「すてっぷ」です。普通のお母さんが、運営委員を募り規約を作り、借家の1階を喫茶、2階を作業場として、クッキーウエス(作業用布)作りの作業をはじめたばかりの頃、私たち銘路YWCAもボランティアとしてお手伝いに加わることになりました。

神戸YWCA

在宅介護事業 神戸YWCAまごの手

最期までぬくもりのある我が家で

神戸YWCAが「まごの手」を立ち上げ、ホームヘルパー派遣事業を始めて今年で10周年を迎えました。「まごの手」の名称には「まごころをこめてお手伝いします」という意味が込められています。「最期までぬくもりのある我が家」をモットーに、「在宅ホスピスケアをめざして」活動しています。介護保険に対応するサービス

ないサービス・ショッピングや食事・観劇のための外出同行、入院中の介護サービスなどにも、保険外サービスや障害福祉サービスで対応しながら、自分らしい自立した生活が送れるよう援助しています。昨年の介護保険制度改正の影響を受けて、活動時間数が減少しましたが、現在は利用者数・活動時間ともに徐々に増えてきています。その一方で、ヘルパー不

高年齢になっても障がいがあっても、最期まで自分らしい生活を営んで頂くためのお手伝いのできたらと願っています。そのために、今後、ボランティアも含めた地域で支えるネットワーク作りを進めてゆきたいと思っています。

銘路YWCA 松田恵美子



中高YWCA紹介

とわの森三愛高等学校YWCA

私たちのクラブは、女子高だったときはYWCA部だったので、現在共学の学校になり、男子も入部できるようにYCA部になっています。部員は11名ですが、にぎやかに活動しています。

普段は、水曜日に外部からの講師を招き、手話の勉強会。木曜日に話し合いをして、これからの活動の方向性を考えます。前期は東北・北海道地区のカンファレンスに向けてレポートを作りました。

その他には、「あしなが学生募金」と知的障害者施設「大倉山学院」のボランティアにも行きました。大倉山学院では、知的障がい者の人たちと一緒に散歩に行ったり、食事のお手伝いをしました。学校外でのボランティアはさまざまな刺激があり、私たちの生活の中ではなかなか気づくことができないこともあります。私たちの動く手や足を見て、恵まれていることを感じました。恵まれているからこそ、手助けを必要としている人と関わりながら、一緒に生きていきたいと思いました。

今後私たちは、ボランティアで学んだ経験を生かしながら、さまざまな人と関わり、助け合いながら生きていきたいと思ひます。

とわの森三愛高等学校YCA部部长 工藤詩織

所在地:北海道江別市文京台緑町569
TEL:011-386-3111

